大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

乳幼児保育カリキュラムの国際比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: オーバーヒューマ, パメラ, 泉, 千勢, 林, 悠子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003190

<翻訳資料>

乳幼児保育カリキュラムの国際比較

INTERNATIONAL PERSPECTIVE
ON EARLY CHILDHOOD CURRICULA
Pamela Oberhuemer

泉　千勢　監修
林　悠子　訳

<解　説>

本論文は、Pamera Oberhuemer 'International Perspectives on Early Childhood Curricula' "International Journal of Early Childhood" Volume 37, Number 1, pp. 27-37, 2005 の翻訳である。著者のパメラ・オーバーヒューマ女史は、バイエルン州立乳幼児教育研究所（IFPドイツ）の研究員（現在はフレーベル研究所所長）であり、OECDの乳幼児保育国際比較調査団に参加し、アメリカ合衆国の調査レポートを担当している（"Starting Strong" 2001）。また、1997年には、国と州の助成金を得て，EU15カ国の保育調査を実施し、"Working with Young Children in Europe—Provision and Staff Training—"PCP（日本語版：泉千勢監訳 OMEP日本委員会訳『ヨーロッパの保育と保育者養成』大阪公立大学共同出版会 2004年）を出版する等、現在幅広く活躍している。本論文は、2004年7月にオーストラリア（メルボルン市）で開催された、第24回OMEP世界大会での報告に加筆したものである。ヨーロッパでは、保育の質について、1980年代から議論されてきたが、保育内容の中核でもあるカリキュラムの国際比較をすることを通じて、保育の質を考える視座を得ようとするものである。

本論文で紹介されている諸国における保育の動向からは、乳幼児保育に対する国の投資が必要であるという認識の下、保育サービスの量的拡大の動きの中で、その質を確保するための手段の一つとして、カリキュラム改革が実施されている様子がうかがえる。

保育カリキュラムの国際比較を通して得られた結果を基に、各国のアプロ

ーチの多様性を背景にして、カリキュラムの担い手である保育者の専門性について、そして、保育の担い手である大人の子ども観や子どもの学びについての考え方についての問い直しがなされている。日本でも、幼保一元化、公立保育所の民営化の動きが本格化しつつある現在、保育の質の向上をどう保障してゆくのかが重要な課題であり、国際比較の視点から見えてくる具体的な課題を明らかにしておくことが、保育の質の問題に取り組むための布石となるであろう。本稿では、原著論文を林悠子（社会福祉学研究科博士前期課程）が翻訳し、泉が監修した。

（泉　千勢）

乳幼児保育カリキュラムの国際比較

パメラ・オーバーヒューマ著
林　悠子訳

概要

世界の多くの国で、乳幼児保育は公共政策の注目を集めている。質の良い保育サービスの提供と、生涯にわたる学習のための良い基盤を保障することについての議論では、カリキュラムに関する問題が新しく生じている。子どもについて我々は何を理解しているのだろうか。子どもたちは、周りの世界にどのようにアクセスし知識を構築しているのだろうか。大人は、子どもが学びの機会を効果的に高めるために何ができるのだろうか。一般的な価値観、伝統、優先事項等によって、このようなカリキュラム課題に対して答え、規定するためのアプローチの仕方は各国で異なる。The State Institute of Early Childhood Education and Research in Bavaria/Germany（バイエルン州立乳幼児教育研究所）を基盤にした最近の調査研究では、世界12カ国の30人の研究者による、革新的で論理的で実証的なカリキュラム研究が行われた。カリキュラムモデルとして、ヨーロッパ５カ国（デンマーク、フランス、ポーランド、スコットランド、スウェーデン）とヨーロッパ以外の５カ国（オーストラリア、

チリ、中国、ニュージーランド、ナイジェリア）のカリキュラムが、その目的と理論的位置づけ、主要な学びの領域、評価方法、小学校との連携、といった点において分析された。本論文では、この国際比較研究での結果の概要を抜粋して紹介し、国家間の共通点と相違点を特定し、研究と政策のアプローチに関して課題を提起する。

キーワード：カリキュラム構成，乳幼児保育、国際的な政策アプローチ、実践者の役割

はじめに

本論文の焦点は、乳幼児保育カリキュラム、特に、国基準カリキュラムの枠組みとそれに関連する問題が、様々な国においてどのように議論され、研究されているか、である。

筆者は主に、State Institute of Early Childhood Research in Munich (IFP)（州立乳幼児教育研究所 於ミュンヘン）で筆者がコーディネートした最近の研究結果について論じる。これはIFPカリキュラム調査を参照したものである（Fthenakis & Oberhuemer,2004）。この調査は、German Federal Ministry of Education and Research（ドイツ連邦教育研究省）による助成金を受けた、乳幼児保育についての大規模な研究プロジェクトの一部であるが、その目的は、ドイツでの専門的職業実践と政策決定に対しての情報提供と活性化のために、他国の保育と政策を調査することであった。この目的に向けて、我々は、カリキュラム開発についての理論的実証的研究と、ヨーロッパ5カ国（デンマーク、フランス、ポーランド、スコットランド、スウェーデン）とヨーロッパ以外の5カ国（オーストラリア／クイーンズランド州、チリ、中国、ニュージーランド、ナイジェリア）の国および州レベルのカリキュラムの枠組み分析についての学術書に寄稿してもらうため、12カ国から30人の研究者を招聘した。本論文は、本研究の結果から抜粋したテーマと課題について論じている。だが、まず初めに、なぜ保育カリキュラムの国際比較研究がドイツの発展にとって必要であったのかを説明することから始めたい。

WHY A CROSS-NATIONAL STUDY ON EARLY CHILDHOOD CURRICULA?
なぜ乳幼児保育カリキュラムについて国際比較研究をするのか

ドイツは、ごく最近になって、乳幼児保育の公的なカリキュラムガイドラインを導入することを考慮し始めたヨーロッパ諸国の数少ない国の一つである。これは、それぞれ独自の教育政策を実施する、16の州から成る連邦政府システムの複雑さに関係している。また、ドイツにおいて60%の保育サービスを提供している民間団体が、カリキュラムの問題については、従来から独自に実施しているという事実も関係している。その結果、そもそもそれらが存在するという条件下で、保育の枠組みはこれまでは非常に一般的に策定されており、最近まで規定が増加する兆候は議論の対象となる問題であった。

しかし、政策決定者と乳幼児保育団体の両者の、乳幼児保育プログラムの国基準カリキュラムに対する態度には、現在革新的変化がおこっている。この変化の重要なきっかけは、OECDの15歳国際学生評価プログラム（PISA）で、2001年12月のPISA調査の第一回結果が発表されたことである。この結果はメディアが大きく報道した。その理由は、ドイツは読む能力、数学能力、科学能力の3つの基礎的能力において、32ヶ国のランク表の中で最下位から3番目だったからである（Baumert 他, 2001）。さらに、不利な状況にある家族や移民の家族の子どもは、この能力に関して最も低レベルに属する子どもが多いことが明らかになった。教育システムは、達成レベルに関して、社会的なバックグラウンドの違いを補うことに明らかに失敗していたのである。

PISAの結果は、このように一般的な教育議論を活発にさせ、1970年代以来、初めて乳幼児保育が公共政策の話題の場に登場したのである（Fthenakis,2003）。バイエルンは16の地方の州（Länder）の中で最初に、誕生から6歳までのカリキュラムの枠組みを作成し、それが現在実施されている（StMAS/IFP,2003）。ほとんど全ての州では、同時期にカリキュラム文書の作成をしており、2004年に、州青少年問題の16大臣と教育の16大臣が、初めて保育施設での教育的職務を指導するための共通の（非強制）枠組みに同意した（JMK,2004;KMK,2004）。

その結果、国際的な発展についての我々の研究は、継続中の政策議論、特にバイエルン州における議論に対して、非常に実用的に貢献することができるようになった。

ドイツでのこれらの政策主導は、実行に移すためにいわゆる「PISA shock」を必要としたが、他の多くの西洋社会において最近の潮流として反響を与えている。乳幼児保育は公共政策の注目を集めることが増加し、政府は、乳幼児保育対策への投資は、重要な社会的目標の達成に貢献するということに、より一層気付くようになった。多くの子どもだけでなく、女性と家族も利益に関連がある。アメリカ、ドイツ、スイス、などの最近の多くの研究では、質の良い保育サービスへの投資がもたらす多様な経済的効果が明らかになっている（Müller Kucera & Bauer,2001;Cubed,2002;Bock-Famulla,2002;Lynch,2004）。保育施策の普及・量的拡大へ向けての、多くの国における動向は、サービスの質についてと、生涯にわたる学習の効果的な基盤をどう保障するか、という一致した議論とともに、カリキュラムの問題において、新しい政策関心を生み出している。

1996年以来、ニュージーランド（1996）、ノルウェー（1996）、フィンランド（1996）、クイーンズランド州（1997）、オーストラリアの他の州と、スウェーデン（1998）、スコットランド（1999）、チリ（1999）、イングランド（2000）といった国の政府は、乳幼児保育の分野にカリキュラムの枠組みを導入することによって、より詳細に規定することを決定した。スウェーデンや南オーストラリア州などの数カ国は包括的な姿勢を取り、誕生から18歳までの教育システムの目標を設定した。ノルウェーなどの数カ国は、誕生から義務教育までのガイドラインを刊行した。オーストラリアのクイーンズランド州などの数カ国は正規の学校教育直前の１～２年に焦点を当てることを選んだ。ほとんどの国や州において興味深いことは、この分野がこのような方法で統制されるのは初めてであるということであった。これはなぜだろうか。６つの主要な理由がIFPカリキュラム調査の中で報告されている（Oberhuemer,2004,p.360）。

（１）　世界経済の文脈において、教育はいわゆる知識社会における価値ある資源として重要性を担っている。カリキュラム規定は、個人の学習の経歴のために不可欠な基盤として乳幼児保育を認知することと、乳幼児保育施設の地位と認知度を向上することへ向けての積極的な貢献として認識されている。

（２）　最近の乳幼児期の脳発達についての神経科学研究は、政策決定者による質の高い保育サービスの供給の教育的将来性の認識をはっきりとさせた。だが、カリキュラム議論のためのこの研究結果はまだ明らかではないことを付け加えなければならない。

（３）　公的運営の新しい形態に由来する、国の地方分権化政策の文脈の中で、カリキュラムの枠組みは、必要な目標へ方向づける舵として、そして教育システム全体としての公的な説明手段として理解されている。

（４）　就学前の保育施設が伝統的に、多様なコミュニティーと文化的グループ、様々な教育的・哲学的アプローチを代表している国においては、カリキュラムガイドラインは、共通の指導原理の枠組みを確立していること、カリキュラムガイドラインの供給は、この分野の主要な利害関係者（ステイクホルダー）との協同において普及してゆくということ、であるとして認識されている。

（５）　資源の少ない民間セクターの著しい拡大に取り組んでいる諸国において、義務的な指針は質の改善と公平さの手段として理解されている。

（６）　最後に、カリキュラムガイドラインは、保育施設のスタッフと保護者の間のコミュニケーションを高めるために、乳幼児保育専門職に、共通の枠組みを与えると考えられている。

規定されたカリキュラムと国のコントロールは先に述べた諸国にとって新

しいステップであるが、研究対象である２つの国、中国とポーランドでは、かなり異なった発展がおこっている。両国は、乳幼児保育者が詳細にわたり中央で規定されたプログラムを実行するために、国基準カリキュラムに長い歴史がある。政治的、教育的システムの変化の中で、地方分権化と多様化への動きがある。例えばポーランドでは、幼児教育者は教育省の推薦する８つの異なるカリキュラムを選択できる。そして、それぞれの地域、施設独自のプログラムの特徴を開発することが促進されている（Karwowska-Struczyk, 2004）。

2002年から2004年は政策主導の序盤期といえる。フランスは、言語発達にさらに焦点を当て、第二言語の学習の指示も含め、1995年のカリキュラム文書を更新した（Rayna,2003）。フィンランドは、６歳児の就学前カリキュラムを、誕生から６歳までの乳幼児保育の核となるカリキュラムに拡大している（Lindberg,2003）。2003年10月、デンマーク政府は教育的枠組み（laereplan）を導入することへの意図を明らかにした。最後にドイツでは、先述したような初めての政策主導が見られる。

国家間の傾向はこのように明らかである。規定についてはそれでよいのだがが、問題は――どのように、ということである。ここで、政策アプローチ間の特に共通点と相違点を見ていこう。

GOALS TO STRIVE TOWARDS OR GOALS TO ACHIEVE?
努力目標、あるいは達成目標？

本研究で提示しているカリキュラムでは、基本的な原理の概要が説明され、学習の領域が明確にされ、遊びは一般的に、子ども期には価値のある学習の形であること、また、福祉（well-being）を強調した子どもの学習への包括的アプローチについても認識した。これらの共通点もあるのだが、カリキュラム文書は多くの異なった側面を見せている。

スウェーデンでは、教育はthe Curriculum for the pre-school（就学前保育カリキュラム）という、１歳から５歳までを対象とした、薄い、16ページの冊子の基本方針による運営システムによって舵がとられている。対照的に、スウェーデンの隣国ノルウェーでは、the Framework Plan for day care Institutions（保育施設の枠組み計画）によって実践の原理、目標、指針が160ページにわたって設定されている。

ニュージーランドでは、バイカルチュラルカリキュラムであるTe Whārikiは、エンパワーメント、ホリスティックな発達、家族と地域、つながり（relationships）、という指導原理を基本として、子どもと地域志向の、５つのカリキュラムの縄の鹿の子織（ストランド）を形成している。（１）幸福、（２）所属、（３）貢献、（４）コミュニケーション、（５）探求。この概念項目の選択は、先住民族（マオリ）の世界観が表現されたものでもあるが、ユニークである。多くの国では、主要な領域は、子どもの発達と学習の側面に（西洋的観点から）はっきりと関係づけられている。例えばフランスでは、公平と統合という共和制の原理に基づいて、（１）言語は学びの鍵となる、（２）共生、（３）動作・身体表現、（４）世界を発見する、（５）感受性・想像力・創造性、の５つの学習領域の、適切な発達を促進することが強調されている（Rayna,2003; Zimmer,2003）。新しく改訂されたカリキュラムでは、言語と識字力（リテラシー・読み書き能力）を援助しながら、フランス語の絶対的な優先付けがなされている。新しい指針にはまた、５領域それぞれの到達目標が詳述されている。

スウェーデンでは、相対的に「努力目標」の抜粋が定式化されているのに対して、オーストラリアのいくつかの州とイギリス、そして現在ではフランスにおいては、強調点は、到達するべき目標におかれている（Woodrow,2004）。スウェーデンでは、目標を実践に結びつけるための特定された方略（方法）は定式化されていないが、例えばイギリスのカリキュラムガイドラインは、「子どもが何をするか」「実践者は何をする必要があるのか」といった目標に関連した規範を与えている（QCA,2000）。

特殊な目標設定は、子どもの学習の評価についての異なる文化に関係していることが明らかになっている。イギリスでの現在の評価手続きは、小学校の7歳児テスト、就学前の年齢では、4歳か5歳での小学校入学基準評価を含んでいる。2003年からは、より能力ベースのアプローチ（子どもは、何ができなければいけないか、ではなく、何ができるか）が導入されている。Foundation Stage Profile（基礎段階プロフィール）（QCA,2003）は、義務教育の前と1年生の2年間にわたる、政府承認の基礎段階のカリキュラム指針が、義務教育1年生の間に完結する、総合的方法の評価アプローチである。

ニュージーランドは、子どもに焦点を当てた、異なった種類のアプローチを採用している。それは、一定期間にわたって個人の学びの道を描くことを強調したものである。それは、ナラティブアプローチ（語り手法）で、それぞれの子どもの「学びのストーリー」に焦点を当てている。その「成果」は、第一に、積極的な学びの素質を高めるという用語で明確にされている（May,Carr & Podmore,2004）。

スウェーデンでは、よりグローバルなアプローチが採用されている。保育所レベルの評価は、子どもに関連した結果にそれほど焦点をあてておらず、より全体的な質の向上に焦点を当てている。保育所は様々な評価手法を利用することを促されており、自治体当局に対して、年次報告書を作成することが求められている。保育所は、地域からも評価されている。例えば、2003年にイェテボリ市では、保育実践者は地方自治体職員、研究者と会談し、政府の改革の影響、改善の必要な領域の明確化、行動施策計画への相互同意、について議論した（Pramling Samuelsson & Sheridan,2004）。

ここでの最も主要な論点は、これらの多様な文書が、乳幼児保育の全体的な機能と目的だけでなく、乳幼児保育の役割についても、明確に述べられた条件と暗に表現された条件との両方を映し出していることである。

ある国では、保育実践者は、よく教育されており、地域レベルの個別の学

習のニーズと可能性によって、かなり抽象的な目標を、効果的な実践に変える思慮深い専門家であるとみなされているのに対して、他の国では、保育実践者は、指定された目標を成功的に実践するための、はっきりとした指針を必要としていると考えられている。このような見方は、乳幼児保育の指導者が初めて職業化された時の、その国の個別の状況に関連している。しかし、養成のレベルと長さと質はどうであれ、保育実践者はカリキュラム問題の担い手としての感覚をもつことが不可欠である。

WHO OWNS THE EARLY CHILDHOOD CURRICULUM?
保育カリキュラムの担い手は誰か？

この問いに対して答えるのに、義務教育での教師の役割が近年どのように変化してきているかを考えることが役立つであろう。国際化の背景に反して、新しい経済的、社会的、知識の文脈が、教育システムに相反する影響を及ぼしているようである。一方では、カリキュラム、指導、学習、評価についての決定に関して、政府のコントロールがより厳しいものになっているという兆候がある。そして他方では、地方分権化、民営化、地方レベルの責任の増大の兆候もある。学校での教師の専門性のための、これらの多様な政策の動きの意味は、国を越えて研究者によって詳しく調査されている（参照例：Hargreaves & Goodson,1996 ;Day & Sachs, 2004）。英語圏の国の多くでは、カリキュラムとそれに関する全てのことは、もはや自主的な専門的実践の領域ではなく、多くの方法で次第に規定されつつある領域となっている。ある意味で、我々は乳幼児保育の領域においても同様の進展を経験しているのかもしれない。国基準カリキュラムが導入される以前は、乳幼児保育カリキュラムは、多くの国では専門的に自立した領域であった。それゆえ、カリキュラム活動の具体的枠組みは、保育実践者にとって、おそらく間違いなく矛盾するものである。一方では、実践者は、専門的実践の規定と法定化によって立場が改善されることを評価している。これはオーストラリア・クイーンズランド州における小規模な実証的調査にもとづいた研究結果である（Grieshaber & Yelland,2004）。他方、規定された枠組みは、実践者の専門的自立を弱体化

させる可能性のあるコントロール作用として解釈されるかもしれない（Woodrow,2004）。もし、遊び、学習、養護（care）が統合された全体として捉えられるならば（Karlsson Lohmander & Pramling samuelsson,2003）、現場での矛盾する緊張は避けられないものになる。

これらは、継続的な専門職の開発活動の問題である。乳幼児保育の保育者は、専門性についての自分自身の考え方を、新しい要求や期待と関係づけながら明確にするための機会を求めている。保育者は、自分たちを専門職として再認識する方法を発見するよう促されることを必要としている。これは、協調して取り組む文化、ある研究者たちが「民主的な専門性」と呼ぶ精神、これらにおいて最もよく達成されうる（Day & Sachs, 2004 ; Oberhuemer,近刊）。民主的で参加型の乳幼児保育カリキュラムは、その枠組みが、生活で満たされることに寄与しており、保育実践者、子ども、親、地域がその担い手である。スウェーデンのカリキュラムは画期的である。カリキュラム目標の実践へ向けての相互の努力におけるチームワークのきわめて重要な役割について、はっきりと強調している。これらの目標は、―Ingrid Pramling SamuelssonがIFP調査への寄稿で指摘するように―、一人ひとりの子どもの満足度、年齢にふさわしい考え方と自己表現として用いられ、実際に実践され、集団の場で取り組まれている（Pramling Samuelsson,2004）。最後に、筆者はこの中心的な問いについて考えてみたい：カリキュラムの記録に根拠を与える、乳幼児の理解と学びのプロセスとは何なのだろうか？

WHAT ARE OUR UNDERSTANDINGS OF YOUNG CHILDREN LEARNING?
乳幼児の学びを我々はどう理解しているか

IFPカリキュラム研究への理論的貢献において反復される姿勢の一つは、我々の子ども期と乳幼児についてのイメージは、ある一連の社会的規範や価値観とともに、特定の歴史的、文化的、地理的、経済的、政治的文脈に深く根付いている、ということである。子ども期は生物学的事実であるが、子ども期

が理解される方法は社会的に決定される。この意味において、乳幼児保育の公式カリキュラムは、ある特定の社会の子ども期の文化的観点と、子どもの学びのプロセスのためのその構造的計画との接点を、文化的に適切だと考えられる子どもの発達の目標として表していると考えることができる（New,2004）。 ある国で支持されている教育的経験は、もしその地域的文脈が取り除かれたら「不適切」であると考えられるかもしれない。我々は、常にこの文脈化の存在に注意しているとは限らない。これは、比較文化的アプローチが照射することのできるところである。それは、不慣れなことにも親しみをもつこと、毎日の実践で当然視されている側面を解明することや、潜在的な仮定や認識論の伝統を明らかにすること、などに寄与することができる。

子どもは社会において行為の主体であり、自分たちの生活の構築と生活に影響を与えることに参画している存在であるということは、乳幼児保育研究者仲間では現在広く認識されている。これは、子どもに近い大人にとって、子どもに耳を傾けることは重要な問題であり、子ども期と子どもの個々の生活の全体的な様相を理解するのに不可欠であり、民主的対話や意思決定に、子どもを巻き込むのに必要な基礎であることを意味している。これらのイメージは、子どもは未熟で依存的な幼い人間であるとして、あるいは単に知識や文化の受け手や再生者として子どもを理解することからは、かけ離れたものである。このように考えると、子ども期は、積極的に取り決められた社会関係の中で、子どものために、そして子どもによって創られている。多様性は個々の学びのプロセスと指導のアプローチのスタート地点であるだけでなく、それらの独特の特徴であらねばならない。

Iram Siraj-Blatchfordよると、彼女がコーディネートした（(Siraj-Blatchford 他　2004)イングランドとウェールズでの大規模な調査結果から明らかになったことは、子どもと思慮深い大人との間の、維持され共有された思考は、子どもの学びに不可欠な条件である、ということである。彼女は、効果的な教育について、次のように述べている。（1）子どもと大人の相互が参画する教育、（2）知識・意味・理解を構築する共同のプロセスとしての教育、（3）

実際にやってみせる、説明する、質問すること（特にオープンエンドの質問は子どもの思考と学びをさらに刺激するものである）として理解される教育。これが意味するのは、教育的要素は、それらが共同で築き上げる積極的プロセスをサポートする時にだけ効果があり、単なる知識の伝達という視点から教育が行われるのであれば効果はない。

結果的に、標準化されたカリキュラムを強要するような試みは不適切であると見なされなければならない。IFPカリキュラム調査の寄稿者であるRebecca Newは、いわゆるスクール・レディネス（就学準備）と関係した能力を最前面に位置づける傾向にあるグローバル経済の課題に対して、プリスクール（就学前教育）を主として反応的な環境へ変化させるというアメリカや他の国での現在の傾向について、懸念を表明している。現在彼女は、カリキュラムを、それらが組み込まれている状況から変えるために、特にレッジョ・エミリアのアプローチに導かれながら、地域指向の学びへ向けようと努力しようとしており、乳幼児保育カリキュラムを、「大人と子どもが、21世紀の生活の現実の問題と想像上の可能性の両方に取り組む、共同作業の概念的な場」として捉えている（New,2004）。

カリキュラムの枠組みが、社会的目標、すべての子どものために追求する目標を形づくるのだが、人間の尊厳の原理は、個々の子どものユニークさ、そして子どもが生活し学んでいる特定の文脈と文化の社会文化的理論を、最前面に位置づける。その意味は、カリキュラムの枠組みは、保育施設、保育者、子どもに同意された、社会的規範と価値観に基づいた目標へ向けて努力しながら、個人の進路を進むために最大限に可能な自由を与えなければならない、ということである（OECD,2004も参照）。これは、知識社会のパラダイムだけでなく、市民社会に位置づけられた展望である。この調和を達成するために努力することは、乳幼児保育の専門家が直面している、困難だがやりがいのある課題の一つである。

引用文献

Cubed, M. (2002). The National Economic Impacts of the Child Care Sector. Study sponsored by the National Child Care Association. http://www.NCCAnet.org

Day, C. & Sachs, J. (2004). Professionalism, performativity and empowerment: discourses in the politics, policies and purposes of continuing professional development, in: C. Day & J. Sachs(Eds.) *International Handbook on the Continuing Professional Development of Teachers,* 3-32. Glasgow: Bell & Bain.

Fthenakis, W.E. (Ed.)(2003). Elementarpädagogik nach PISA. Wie aus Kindertagesstätten Bildungseinrichtungen werden können. Freiburg, Basel, Wien: Herder.

Fthenakis, W.E. & Oberhuemer, P.(Eds.)(2004). *Frühpädagogik international. Bildungsqualität im Blickpunkt.* Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Grieshaber, S. & Yelland, N.(2004). Auswirkungen eines neuen Curriculums auf Vorschulpraxis: Eine australische Fallstudie, in: W.E. Fthenakis & P. Oberhuemer(Hrsg.) *Frühpädagogik international. Bildungsqualität im Blickpunkt,* 142-160. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Hargreaves, A. & Goodson, I.F.(1996). Teachers' Professional Lives: Aspirations and Actualities, in: I.F.Goodson & A. Hargreaves(Eds.) *Teachers' Professional Lives.* London and Washington DC: Falmer Press.

Karlsson Lohmander, M. & Pramling Samuelsson, I.(2003). Curricula for Early Childhood Education —Mirroring play, care and learning in cultural contexts, in: M. Karlsson Lohmander & I. Pramling Samuelsson(Eds.) *Researching Early Childhood. Care, Play and Learning. Curricula for Early Childhood Education.* Vol 5, 211-219. Göteborg University.

Karwowska-Struczyk, M.(2004). Curriculumentwicklungen in Polen: Auf dem Weg zu Meinungsfreiheit und Bildung, in: W.E. Fthenakis & P. Oberhuemer(Eds.) *Frühpädagogik international. Bildungsqualität im Blickpunkt,* 227-240. Wiesbaden: VS Verlag Für Sozialwissenschaften.

KMK(Sekretariat der Ständigen Konferenz der Kultusminister der Länder in der Bundesrepublik Deutschland)(2004). Ergebnisniederschrift der 306. Plenarsitzung der Kultusministerkonferenz am 03./04. Juni 2004 in Mainz

Lindberg, P(2003). Aspects of Play in the Steering Documents of Finnish Early Childhood

Education, in: M. Karlsson Lohmander & I. Pramling Samuelsson (Eds.) *Researching Early Childhood. Care, Play and Learning. Curricula for Early Childhood Education* Vol 5, 111-125. Göteborg University.

Lynch, R.G. (2004). Exceptional Returns. Economic, Fiscal and Social Benefits of Investment in Early Childhood Development. Washington: The Economic Policy Institute. http://www.epinet.org/content.cfm/books_exceptional _returns

Müller Kucera, K. & Bauer, T.(2001). Volkswirtschaftlicher Nutzen von Kindertagesstätten, Edition Sozialpolitik Nr. 5, Büro für arbeits-und sozialpolitische Studien, Zürich.

New, R.S.(2004). Kultur und Curriculum: Reflexionen über 'entwicklungsangemessene Praxis' in den USA und Italien, in: W.E. Fthenakis & P. Oberhuemer (Eds.) *Frühpädagogik international. Bildungsqualität im Blickpunkt*, 31-56. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Oberhuemer, P.(2004). Bildungskonzepte für die frühen Jahre in internationaler Perspektive, in: W.E. Fthenakis & P.Oberhuemer (Hrsg.) *Frühpädagogik international. Bildungsqualität im Blickpunkt,* 359-383. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Oberhuemer, P.(forthcoming). Conceptualising the early childhood pedagogue. Policy approaches and issues of professionalism.*European Early Childhood Education Research Journal.*

OECD (2004). Curricula and Pedagogies in Early Childhood Education and Care. Five Curriculum Outlines. Paris: OECD Directorate for Education.

Pramling Samuelsson, I. (2004). Demokratie: Leitprinzip des vorschulischen Bildungsplans in Schweden, in: W.E. Fthenakis & P. Oberhuemer (Hrsg.) *Frühpädagogik international. Bildungsqualität im Blickpunkt,* 161-174. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Pramling Samuelsson, I. & Sheridan, S.(2004). Recent Issues in the Swedish Preschool. *International Journal of Early Childhood,* 36(1), 7-22.

QCA (Qualifications and Curriculum Authority) / DfEE (Department for Education and Employment)(2000). *Curriculum Guidance for the Foundation Stage.* London: QCA/DfEE.

QCA (Qualifications and Curriculum Authority)(2003). *Foundation Stage Profile.* http://www.qca.org.uk/ca/foundation/profiles.asp

Rayna, S.(2003). Play, Care and Learning: Curriculum for early childhood education in France,

in: M.Karlsson Lohmander & I. Pramling Samuelsson(Eds.) *Researching Early Childhood. Care, Play and Learning. Curricula for Early Childhood Education.* Vol 5, 127-141. Göteborg University.

Siraj-Blatchford, I., Sylva, K., Muttock, S., Gilden, R. & Bell, D.(2002). Researching Effective Pedagogy in the Early Years. Research Report No.356. London: Department of Education and Skills.

South Australian Curriculum, Standards and Accountability Framework-SACSA(2001), http://www.sacsa.sa.edu.au

StMAS/ IFP(Bayerisches Staatsministerium für Arbeit und Sozialordnung, Familie und Frauen & Staatsinstitut für Frühpädagogik München)(2003). *Der Bayerische Bildungs- und Erziehungsplan für Kinder in Tageseinrichtungen bis zur Einschulung.* Entwurf fur die Erprobung. Weinheim, Basel, Berlin: Beltz.

Woodrow, C.(2004). Umkämpftes Terrain: Neuordnung des Curriculums im australischen kontext, in: W.E. Fthenakis & P. Oberhuemer(Hrsg.) *Frühpädagogik international. Bildungsqualität im Blickpunkt,* 241-250. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

Zimmer, A.(2003). Erst- und Zweitspracherwerb in der *école maternelle* in Frankreich, in: E. Hammes-di Bernardo & P. Oberhuemer (Eds.) *Startchance Sprache. Sprache als Schlüssel zu Bildung und Chancengleichheit.* Jahrbuch 8 des Pestalozzi-Fröbel-Verbandes, 152-166. Baltmannsweiler: Schneider-Verl. Hohengehren.

付記：

本研究は、平成14年度～17年度科学研究費補助金基盤研究（C）－２（課題番号14510239）「保育カリキュラムの国際比較－保育の質と評価の視点から－」（研究代表埋橋玲子）の一環としてなされたものである。